

ART KISS

LETTER VOL. 64

2013 秋



上:アラフマヤーニ《交差点》(部分)

下:ナウイン・ラワンチャイクン《ナウインはどこ?》(部分)

ともにシンガポール美術館蔵

巻頭言

変貌するオックスフォード

この九月に私が訪れたイギリスのオックスフォードは、「夢見る尖塔の都市」と呼ばれ、その街並みは、数十年前と全く変わっていないなかった。しかし以前と異なり、世界各地からのおびただしい数の観光客が訪れ、九〇〇年の歴史を持つこの大学都市は、国内でも有数の観光都市となっていた。小雨煙る古風な街並みの雑踏を縫っていくと、その外観はかつてと変わらないのに、大きな変化が起こっていた。メイン・ストリートをちよつと入った所に、最新のショッピング・モールやデザイン・オフィス、研究所があり、外観は古びたアーケード街の内側に、目を見張るブランドショップが並ぶ。中世以来の尖塔の街の外観を頑固に維持しながら、内部で新しく生まれ変わろうとしているのだ。

この街の世界最古の美術館であるアッシュモレアンも、建物そのものや外観は全く変わっていないのに、大改修を終えた内部の斬新さには息を呑んだ。さらに、ここで開催されていたのが、二十世紀西洋美術の二人の巨人、フランシス・ベーコンとヘンリー・ムーアの衝撃的な二人展であった。一方は人間存在の不条理を激しい色彩とタッチで描く画家であり、もう一方は慈愛に満ち、宇宙的静謐感をたたえた彫刻家であり、彼らの作品を比較、並列して見ることは今までほとんどなかった。しかしアッシュモレアン美術館の密度の高い展示空間に作品が集散的に並ぶとき、二人の作家の人体表現の共通した原点が立ち現われてくるのだった。この展覧会には、さらに彼らが深い影響を受けたミケランジェロとロダンの素描が展示されており、ベイコンとムーアが、西欧ルネッサンスからの美術の流れの中で、二十世紀における一つの到達点であることを示しているように思えた。この展覧会は、重層する歴史の中で新しくなろうとしている都市オックスフォードの、注目すべき一例と言えよう。

熊本市現代美術館館長 桜井武

MUSEUM INFORMATION

第20回 お話し玉手箱 LIVE

2013.9.21



RKKアナウンサーの本田史郎さんと福島絵美さんによる「お話し玉手箱LIVE」もついに20回目を迎えました。今回の演目は、源氏物語から「六条の御息所」(瀬戸内寂聴訳)、芥川龍之介「魔術」の2作品。

「六条の御息所」では、源氏に宛てた手紙のシーンをしとやかな声で福島さんが読み上げられる姿が印象的でした。そして、人間の欲深さが描かれた「魔術」では、ミステリアスな物語と本田さんの臨場感あふれる朗読に会場の皆さんも聞き入っていました。(Y・M)

【参加人数60人】

詩の朗読会

くまもと詩の朗読の会共催の自作の詩の朗読会です

テーマ「不思議」

2013.8.22

第117回のテーマは、「不思議」。飛び入りの方2名を含む18名が詩作を発表しました。ボランティアに参加し、子どもたちのふれあいを通じて不思議な力が湧いてくること。同じ時間と同じ場所で、30年ぶりに友人と再会する偶然が必然と感ずる不思議。「他者があ



るから自己がある。苦しむから福がある。」といった対照的な言葉の不思議など、様々な視点から表現されました。(Y・M)

テーマ「汽車(鉄道)」

2013.9.26



第118回のテーマは「汽車(鉄道)」でした。鉄道にまつわる思い出について書かれた方、画集を見ながら詩作したという方、ハーモニカによる演奏を付けた詩の朗読など、様々な形の詩を朗読していただきました。

それぞれの想いや出来事とともに、人が汽車(鉄道)と共に歩んできた時間を思い起こされるような会となりました。参加者は14名。うち1名の飛び入り参加がありました。(K・O)

【参加人数14人】

CAMKEESの活動

美術館ボランティア CAMKEES(キャンキース)による活動紹介

CAMK「読みがたり」第48回 テーマ「夏をたのしもう！」

2013.8.10

絵本「おつきちゃんとかっぱ」や、手遊び「て・て・て」「トントントントネル」などお話しと手遊びをそれぞれ紹介しました。絵本「わがはいはのつべらぼう」は、のつべらぼうの生活を紹介しますので、ちよつと怖くてももしろいのつべらぼう



の絵本に子どもたちが引き込まれていく様子が印象的でした。

紙芝居「みんなでたいそう」は、うさぎの体操では「ピョンピョン」、へびの体操では「ニョロニョロ」、ロボットの体操は「カクカク」など、みんなで体全体を使って表現し楽しみました。たくさんのお友達に来ていただき大盛況でした！(N・H)

【参加人数54人】

CAMK「読みがたり」第49回

テーマ「お月見」

2013.9.21



絵本「おつきさまこんばんは」や、手遊び「虫かご」「十五夜のもちつき」など、秋の雰囲気を感じる読みがたりとなりました。自分のすてきなところを探すとぐまが主人公の絵本「つきのわこぐま」は、水たまりに映った月を見て自分のすてきなどころに気がつくというお話。じつと絵本を見つめる子どもたちの姿が印象的でした。(Y・M)

【参加人数13人】

ミュージック・ウェブ

「熊本まちなか美術館」の一環で募集されていた「フォトコンテスト」の表彰式がホームギャラリーで行われました。「まちなかのドラマを切り撮れ！」というテーマのフォトコンテストには力作がずらり。受賞した力作は、8月24・25日に上通の長崎書店前に展示されました。身近な風景をドラマティックに切り取る素晴らしさに、美術館スタッフも写真を撮ってみたいと思わせる内容でした。(A・S)

喜多敏博さんによる、「ラップトップミュージックコンサート&ワークショップ」を開催しています

ミュージックウェブ071

ラップトップミュージック

ラップトップ&ワークショップ

2013.8.10



音楽やスマートフォンによる操作と連動させた音楽に触れていただきました。

前半は、喜多さんがアレンジしたコンピュータの自動計算によって生まれる音

楽と、スカルラッティ(バッハと同時代に生きたイタリアの作曲家)の曲をコンピュータで再現したラップトップによる音楽コンサート。そして後半は、ワークショップの参加者がスマートフォンや端末の画面をタッチすることで音を鳴らしたり、スマートフォン向けの向きによってスピーカーの音の流れを操作したりすることで、音の変化を体験するワークショップ。皆さん、その仕組みに興味津々で、参加者の小さなお友達も真剣な表情がとても印象的でした。ラップトップから生まれる音の不思議を体験するひと時となりました。(A・A)

【参加人数WS参加者14組/コンサート70人】

熊本まちなかフォト コンテスト表彰式

2013.9.1

「熊本まちなか美術館」の一環で募集されていた「フォトコンテスト」の表彰式がホームギャラリーで行われました。「まちなかのドラマを切り撮れ！」というテーマのフォトコンテストには力作がずらり。受賞した力作は、8月24・25日に上通の長崎書店前に展示されました。身近な風景をドラマティックに切り取る素晴らしさに、美術館スタッフも写真を撮ってみたいと思わせる内容でした。(A・S)

公開シンポジウム

「市民と共にミュージアムIPM」での発表

2013.10.12

「市民と共にミュージアムIPM」実行委員会（主催：九州国立博物館ほか）が開催した公開シンポジウムに、事例報告のうちの1件として「IPM導入とそれからの4年間―その背景、これまでの取組み、今後の展望―」と題し、当館学芸員富澤が館を代表して発表を行いました。2010年に借用作品で煙草事故を起こし、収蔵作品・借用作品を守るための環境作りと、守るための知識の必要性と重要性を館職員全員が実感したことからはじまった、当館のミュージアムIPMの導入でしたが、この4年間、館内環境を把握、少しずつ改善してきた実績と、そして今後の展望についてお話ししました。基調講演や基調報告、他館の事例報告の発表は、どれも大変活気のある充実した内容でした。そして、どの発表者・報告者も、IPM活動をただの一業務としてだけではなく、館や組織を連帯させ・活性化させるツールとしても活用しているという点が共通していました。（H・I）

月曜ロードショー上映報告

上映リスト(8/1 ~ 10/13)

- 8月5日「ヨーロッパ」1991年 デンマーク、フランス、ドイツ、スウェーデン映画 108分
- 8月12日「二世部隊」1951年 アメリカ映画 91分
- 8月19日「紙屋悦子の青春」2006年 日本映画 111分 *日本語字幕付き
- 8月26日「ピナ・バウシュ 夢の教室」2010年 ドイツ映画 89分
- 9月2日「エニグマ奪還」2001年 ドイツアメリカオーストリアハンガリー映画 102分
- 9月9日「嘘つきは恋の始まり」2008年 アメリカ映画 93分
- 9月16日「自由への闘い」1943年 アメリカ映画 103分
- 9月23日「モロッコ」1930年 アメリカ映画 91分
- 9月30日「悲しみのミルク」2008年 ペルー映画 98分
- 10月7日「現金に手を出すな」1954年 フランス、イタリア映画 97分

CAMK人形劇「さるかに合戦」

2013.8.25



劇団ぱれつとによるCAMK人形劇「さるかに合戦」を開催しました。当日は大雨に雷といった空模様でしたが、ホームギャラリーには300人を超える観客で熱気むんむん。子ガニが一番人気と思いきや、子どもたちの歓声を一番受けていたのは、なんと脇役のウランチ。思わず立ち上がる子どももいて、大盛り上がりのお演じになりました。（E・Z）

CAMK秋のピアノコンサートvol.14

2013.9.14



CAMKピアノボランティア有志による、秋のピアノコンサートvol.14が開催されました。今回は5名のピアニストが参加。一言ずつ曲

毎週月曜日14時・18時より 無料

についてのトークを交え、日頃は弾かないお気に入りの曲をのびのびと披露していただきました。（K・O）

【参加人数30人】

ワークショップ

「ケータイ・スパイ大作戦」

2013.8.1

スマートフォンカメラ機能を使って鬼ごっこをし、そのルール作りを行うワークショップを山口情報芸術センター（YCAM）エデュケーターの会田大也さんを講師に迎えて行いました。まずは、鬼ごっこをしながらカメラで相

手を撮影したものをメールでパソコンに送ります。その後、送られた画像を見ながらルール・ディスプレイを行って、みんなが平等に楽しく遊べるルールを考え、これを計3セッション行いました。ワークショップを終えた後にも、「今度はこういう風にしたらもっと楽しくなる」などといった声飛び交い、ルールがあるから、より楽しく集中して遊ぶことができるのだと実感しました。（A・S）



【参加人数12人】

VOL.17

「芸術起業論」



著者：村上隆 出版：幻冬舎 2006年

この本は芸術の世界で成功する方法を説いた「超ビジネス書」です。著者の村上隆いわく、これまで日本人アーティストがごく一部しか世界で通用しなかったのは「欧米の芸術の世界のルールをふまえていなかったから」。では芸術の世界のルールとはいったいどのようなものなのでしょう？

本書では世界を相手に活躍してきた「ワールドクラス」のアーティストである村上が、欧米での作品の価値判断のされ方から、評価される

作品を作るための考え方、そしてそれを売り込む戦略まで、世界で戦うためのノウハウを熱く語ってくれます。欧米では知的な「しかけ」や「ゲーム」を楽しむことが芸術に対する基本的な姿勢で、過去の美術史の文脈をふまえることが重視されること。芸術の顧客は栄耀栄華を極めた大金持ちであること。そういった業界の構造をふまえて、アーティストはいかに自分と自分の作品を売り込むべきなのか？村上が実体験を語る部分では、彼が等身大フィギュア作品を作ったときを例に、発想の始まりから実際に作品ができてそれが6800万円売れるまで、意外に（？）どたばたしたアーティストの制作の実態をかいま見ることが出来ます。

実際に自分が芸術で起業しようと思っていふことは多くないでしょうが、業界の内側をのぞくようなこれらの部分は刺激的で誰が読んでも楽しめるはず。そして美術業界の仕組みやアーティストが何を考えて作品を作っているのかを知れば、これまで何がいいのかさっぱりわからなかった現代美術の作品も何やらおもしろくて価値があるもののように見えてきます。そういう意味では、本書は「現代美術は見方がわからない！」という人にもぜひ手に取ってもらいたい一冊です。（G・S）

ワークショップ
美術館で宿題を終わらせ
ちゃおう!

2013.8.18

毎年恒例のアー
トえんにちのイベン
トとして、「ワーク
ショップ 美術館で
宿題を終わらせちゃ
おう!」が開催され
ました。定員24名を
はるかに超える40名
の子どもたちが参加
してくれました。ゴ
ミ減量や障がいなど
のポスターの内容に
ついて、それぞれの
担当課職員の方から
説明を受けたあと、
学芸員実習中の大学生のお兄さん、お姉さ
んと一緒にポスターを描きました。最初は
緊張気味の子どもたちでしたが、最後はお
兄さん、お姉さんと仲良くなつて、楽しく
ポスターが描けたようです。(E・Z)



「魔法の美術館」展
ナイトツアー

【参加人数40人】

2013.8.8/8.10



日頃の感謝を込めて、
上通・下通・新市街の商
店街の皆様を閉館後にご
招待するナイトツアー
を開催しました。
初めて参加したとい
う方や、前回も参加し
たという方まで、なんと
130名の方にご参加
いただきました!ご家族

での参加者が多く、作品を囲んでにこやかに
笑いあう姿が印象的でした。最後の最後
まで作品に見入っている方もいらつしやり、
夏の夜のひと時を光のアートと共に、楽し
くご観覧いただきました。(A・S)

【参加人数130人】

「魔法の美術館」展
プレママ&ファミリーツアー

2013.8.17



魔法の美術館展
のプレママ&ファミ
リーツアーを行いま
した。たくさんのご
参加をいただいたた
め、14組の皆様を2
グループに分かれて
スタートしました。
普段はゆっくりと観
覧できる土曜の午前中もなかなかの大賑わ
い。それぞれ作品の仕組みや遊び方の説明
を学芸員に受けながら最後まで楽しく観覧
することができました。(A・S)

【参加人数38人】

2013.9.8

「魔法の美術館」展
7万人達成!!



大盛況のうちに終
了した魔法の美術館
展ですが、会期後半
になると毎週1万人
以上のご来館をいた
だきました。8月14
日、21日、28日、9
月4日にそれぞれ3、4、5、6万人セレモ
ニー、最終日の9月8日に7万人セレモニー
を開催でき、最終的には72049人と美
術館開館以来、歴代2位の来館者数を記録
することができました。(A・S)

「Welcome to the Jungle 熱々!東南
アジアの現代美術」展
展覧会特別講演会1

2013.10.5



「Welcome
to the Jungle
熱々!東南ア
ジアの現代美
術」展の開幕
を記念して、
展覧会の共同
キュレーターの
カイルディン・
ホリ氏(ナショナル・ヘリテージ・ボード、
シンガポール、シニア・キュレーター)によ
る講演会を開催しました。
講演会では、展覧会のコンセプト、出品
作品の解説、東南アジアのアートシーンに
ついてお話いただきました。東南アジアの
地域は、多様な言語、宗教、民族、歴史を
もつ人々が共に暮らしています。カイ氏
のお話から、そういった複雑な背景や現代社
会の問題が、出品作品の背景に深く関わっ
ていることがわかり、オーディエンスの皆
さんは熱心に耳を傾けていました。(A・A)

【参加人数40人】

熊本市現代美術館開館11周年記念イベント①
「うわさバジ屋台&うわさ神社」

2013.10.12



上通アートプロ
ジェクト第2弾とし
て春から開催してい
るうわさプロジェクト
の「うわさ屋台」
と「うわさ神社」が
開館記念イベントに
再登場しました。う
わさ屋台はオレンジ



色のバ
ジが目
惹くら
し、準
備中
にも関
わらず
から次
に人が
集まっ
てきて
いまし
ました。
商店街
の方が
「またや
つてる
ね」と
スタッフ
に声を
かけ
ては、「
超吉」
をひい
た人が
大喜び
してい
ました。
好天の
秋空に
ふさわ
しい大
盛り上
がりの
イベン
トとな
りました。
(E・Z)

【参加人数500人】

熊本市現代美術館開館11周年記念イベント②
「きゅうはくキャラバン」

2013.10.12

開館11周年のイ
ベント
として、開
催中
の「Welcome
to the
Jungle 熱々!
東南ア
ジアの現代
美術」展
に関連し、
九州国立
博物館(以
下・九博)
による「き
ゅうはく
キャラバン」
の出張



ワークショップ
を実施しま
した。九博
スタッフと
ボランティア
さんに来場
いただき、
び
ぶれす広
場で「ま
まきまき
ファッション」
、「ワ
ヤン・ク
リッ(イン
ドネシアの
影絵)」、「
ド
ナムの天
秤棒体験」
の5つの
コーナーを
展開。CAM
Kスタッフ、
ボランティア
さんにと
ともに、リ
ラックス
した楽し
い雰囲気
で、皆
さんそ
れぞれ
の体験
にチャ
レンジ
してい
らつし
やいま
した。(A
・S)

【参加人数600人】

〈相撲生人形〉は
どの角度から見ても
迫力満点!



MUSEUM INFORMATION

G III

ギャラリーⅢ(G III)は、
熊本、九州のアーティストを紹介し、
応援していくスペースです

G III vol.93 相撲生人形 と熊本の祭り展

2013.9.11-10.6

本展は、当館所蔵の安本亀八(相撲生人形)と、熊本各地の祭りや行事を記録した写真家の白石巖の作品群(熊本県松橋収蔵庫所蔵)をあわせてご紹介する内容でした。

安本亀八[初代(1826-1900)]/2代(1857-1899)/3代(1868-1946)による《相撲生人形》(1890)は、相撲の始祖である野見宿禰と当麻蹴速のご御前試合を題材とする作品ですが、もともと見世物興行の場で発表されました。この作品の見どころは、スーパーリアルな造形はもとより、両者の肢体が複雑に絡み合って一体化し、360度全方位からの鑑賞を目的として制作されている点です。高度な技術に基づく蹴速の不安定なポーズが、作品全体に強いインパクトを与えている当館自慢の名品です。

白石巖(1921-1995)は、長年にわたり様々な熊本県内の行事をひろく撮影しました。丹念に調査されたデータとあわせてその資料群は、第一級の民俗写真資料と高い評価を受けています。祭りに関する写真資料45点を出品しました。(H・T)



相撲生人形と熊本の祭り展 ギャラリートーク

2013.9.16



員富澤とが、それぞれ収蔵作品についてのギャラリートークを行いました。

國本さんのトークは、熊本各地の祭りや行事を記録した白石巖の写真作品群について行われました。会場内は、壁ごとにゾーニングされており、最初に、「つくりもの」続いて、1年を通じての熊本の祭り(1月から始まり)、そして、秋の祭り、山の祭り、川の祭りと展示されています。

「年徳棚」を見ながら、「以前は、正月は年を取る月で、皆がおとしまをもらいました。ここには家族の人数分の鏡もちがあります。」また、「山の祭り」作品群をみながら、「山の神様はいくつか種類があつて、出産を助けてくれる女性の神様や、お盆に里帰りする「ご先祖さま」という神様が山に住んでいると考えられています」など、かつてより生活に組み込まれていた行事や祭りが、現代の我々の意識のなかにもゆるりとつながりあっていることを感じさせる大変興味深いトークが行われました。

相撲生人形については、作者の安本亀八が熊本出身で、「つくりもの」を通して青年期に技術を磨いたとされていること、また、作品が13パーツで出来上がっていること、重さが軽い(47キロ)であること、作品を

相撲生人形と熊本の祭り展 CAMKレクチャーカレッジ 「相撲生人形について」

2013.9.23



相撲生人形と熊本の祭り展関連イベントとして、CAMKレクチャーカレッジ「相撲生人形について」講演会を開催しました。

前半はホームギャラリーで、相撲生人形の組立方法を細かく手順ごとに写真と解説でご紹介しました。また、今回の展示にあわせて当館ボランティアグループCAMKERSの布絵本ボランティアさんたちに復元制作していただいた野見宿禰の到着が完成に至るまでの様子を写真でご紹介しました。

後半は、実際に展示されている相撲生人形を見ながら、二人の男たちが、皮膚の色、表情、体毛の描写表現、そのポーズに至るまで、意識して対照的につくられていることや、血管の浮き出た表現や筋肉の緊張が、過剰に表現されつつもリアルに基づいているので、違和感を覚えさせない点など、その身体表現のレベルの高さなどを紹介しました。

参加された方々も、相撲生人形への興味や知識が高く、非常に重要な質問なども挙がりました。相撲生人形が、熊本市民に深く愛され、作品としての存在感が増しつつあることを肌身に感じ、とてもうれしく思いました!(H・T)

【参加人数35人】

G III vol.94「鉄魂ブギ 藤本高廣のくず鉄魂」展

2013.10.12-128



熊本を代表する鉄のアーティストZUBE(ズベ)さんこと藤本高廣さんによる「鉄魂ブギ」展がギャラリーⅢで行われています。搬入時に次々と運び込まれてくる作品に、スタッフ一同「こんなに会場に入るの?」と心配になる一幕も。しかし無事に巨大なバイク作品や、ズベさんのアトリエの部屋を再現した「鉄子の部屋」など力強くユーモアあふれる会場が完成し、多くのお客様で賑わいました。(A・S)

「鉄魂ブギ」展 アーティスト・トーク

2013.10.13



鉄魂ブギ展のアーティスト・トークが、歌手の坂本スミ子さん、サンワ工務店社長の山野潤一さん、作家の坂口恭平さん、コーディネーターに面木つよしさんをお迎えして開催されました。

坂本スミ子さんの素敵な歌で華やかにスタートした会は、トークになると爆笑の連続。笑いありしみじみする場面ありと、ズベさんの作品そのもの人間味あふれる内容に、詰めかけた120人を超えるお客様も引き込まれているようでした。(A・S)

【参加人数120人】

ART DE GYAN

アート・どぎやん。

*熊本弁でアートはどのような?という意味です

本号は、当館学芸員実習での実習課題のひとつとして行われた、実習生による取材記事をあわせて掲載します。

【飯尾寿子(H・I)、大井美咲(M・O)、大和千織(C・O)、栗原悠(H・K)、佐藤真琴(M・S)、高倉恵(S・T)、高松美彩(M・T)、田川彩桜花(T・T)、立石英彰(H・T)、田中雅子(M・Ta)、田邊友恵(T・T)、永山佳寿美(R・N)、西岡早紀(S・N)、花木瞳(H・H)、比嘉夏子(N・H)、東田麻衣(M・H)、三津木浩之(H・M)、森田佑加(Y・M)、山下夏美(N・Y)、横田美月(M・Y)、吉田真希(M・Yo)】

第二回 東日本震災支援による 詩と写真展

2013.8.16-21

画廊喫茶 三点鐘

TEL 096・326・3040



今年で二回目となる東日本震災を題材とした展覧会。昨年に続き鎮魂の意味を込め、お盆の時期に開催され、30点の作品が展示された。

詩を書かれた濱田龍郎さんは、NPO法人「九州ラーメン党」を立ち上げ、ラーメンの無償提供など精力的にボランティア活動を行ってきた。

その一環として東日本震災の被災地にも訪問しており、被災地で感じたことを詩で綴っている。この展覧会では濱田さんと共に活動をしている山元慎一さんが撮影した被災地の写真も展示している。濱田さんの作品の中でも一際目を引くのが人という文字が組み合わさった力強い作品である(写真参照)。写真では、昨年よりも笑顔が増え、人々の復興に対する希望があらわれている。(M・Y/M・Yo)

堤啓二個展

2013.8.21-31

画廊喫茶 南風堂

TEL 096・343・9664



熊本市出身の画家、堤啓二さんの個展が「画廊喫茶 南風堂」で行われた。

堤さんは、中学校で美術を教えながら水彩連盟会員として作家活動をされていたが、2011年に退職し、夫婦でヨーロッパに1ヶ月間滞在。これまでは、日本の風景が多かったが、今回の作品は滞在先で出会った風景を描いたもので、アクリルと水彩絵具による14点が並ぶ。冒頭の作品、「青い空のサラマンカ」は、日本とは異なる青空が印象的だ。また最新作では、抽象表現も取り入れ、積極的に新しい挑戦を続けている。

ところでこの「画廊喫茶」は、熊本独自の画廊形態で、ここ南風堂も30年近く熊本の作家を見守ってきたという。いわば「共在共栄」の間柄。常連さんが集う温かな雰囲気の中、深い信頼関係を感じることが出来た。(M・Ta/H・I/M・T)

第28回 さくひん展 はずみ南絵画クラブ

2013.8.21-31

画廊喫茶 ジェイ

TEL 096・372・8732



はずみ南絵画クラブの9名による「さくひん展」。毎年夏に開かれ、今年でも28回目になる。店内に入ると、やわらかな照明の中でひととき

緑の色彩が目に入ってくる。5、6月頃の緑豊かな季節を描いた作品が多く、展覧会の一歩の見えるところである。風景画の他にも人物画や動物画もあり、豊田みさ子さんが描いた2匹の猫の絵《仲良し》はパステルのやわらかなタッチから飼猫への愛情が伝わってくる。

また、私たちは《唐がらし》というタイトルの絵に心惹かれた。ジェイを経営する永田順子さんの作品だ。深みのある青を背景に鮮やかな赤や黄土色などの暖色が映える。版画紙に墨や水彩の混合技法で描かれており、画材はスペインから取り寄せたこだわりのものを使用しているそう。油絵、水彩など様々な画材で描かれた12点の作品群は素朴さの中に生命力を強く感じさせた。(I・T/S・N/N・Y)

あんずの会押し花展

2013.8.21-26

アトスペース大室堂

TEL 096・354・2155

年に一回、菊花フラワーバンク所属の先生方とその生徒さん方によって行われている今回の合同展。会場には先生と生徒

71名による計89点の作品が展示されており、色とりどりの押し花による作品で会場は華やかな雰囲気を出していた。



押し花には花や草木から布やパステルなど様々なものを活用しているが、中でも茄子の皮やレタスなどの野菜も押し花の中の作品として活用されているのがとても魅力的だ。また、中には「熊本のよかとこを再発見し、押し花で熊本をPRしよう」という試みで、熊本ゆかりの風景や行事などを押し花で表現している作品が多数見受けられた。阿蘇の広大な草原や水前寺公園などの作品が印象的で、熊本の魅力を再認識することができた。作品からは物語や音、静けさなどが伝わってくるようで、作品の世界に引き込まれ、心が掴まれてしまうものばかりだ。押し花という、生き生きとした表現の魅力をこの個展によって、強く感じられずにはいられないだろう。(M・H)

第6回 白州会展

2013.8.20-26

県民百貨店6F 美術画廊
TEL 096・322・1111



大正13年、外遊帰りの若い画家たちが帰国後の研究をすすめるために結成された白日会。白日会の中でも、九州出身の作家たちで構成されたのがこの白州会である。県民百貨

古川善久陶展

2013.8.20-25

熊本県伝統工芸館2階展示室A

TEL 096・324・4930



山鹿市の工房でやまが野火焼きを制作している古川善久さんの個展が開催さ

れた。やまが野火焼とは、釉薬の類は一切使用せず、(コップなど作品の底にのみオリジナルの釉薬を使用)作品の周りに炭を置いて焼くことで、茜色、金色などを発色させる独自の技法だ。今回の個展では、約200点を展示した。野火焼きは釉薬を使用していないため、使うことにより、よりしつとりと変化し、長く使う事で味わいが出てくるのが特長だ。また、焼きあがりにはひとつひとつ異なり、それぞれ違った表情を楽しむことができる。和洋どちらにもしつくりくるような色合いや形が魅力的である。いつまでも手にとって眺めていたくなった。(T・T/N・H)

手作り和雑貨と ねんどの花展

熊本県伝統工芸館 地下和室



永田みずえさんと木下孝子さんによる今回の展示会は、すべて二人の手作りの作品によるものであり、この展示会の特徴は販売を兼ねていることであり、当初は260点の作品があったそう

2013.8.20-25

第4回花園陶遊会 作品展

熊本県伝統工芸館

花園陶遊会作品展は平成24年に続き4回目の開催である。花園陶遊会は熊

2013.8.20-25

本市の生きがいと創造の事業の陶芸講座で、市内に在住する60歳以上の方々によって構成されている。

約600点の個性豊かな陶芸作品が展示されており、優しい色合いのものや釉薬を用いて美しいグラデーションを見せるものなど、様々な作品が集まった。



多くの器の作品がある中で、登田久米男さんの7点のお面はひととき目を引いた。金剛力士像や、般若、鬼をモチーフに制作されたお面はデフォルメされ、可愛らしいものから憤怒の表情をみせるものまで幅が広い。特に登田久米男さんのお気に入り「なんまいだー なんまいだー」という、3点連作の作品である。仏心が表現されており、柔和な表情とその可愛らしい姿に心惹かれる。(M・O/K・N)

第六回岩本武士 書作展

熊本県立美術館分館

TEL 096・351・8411



2年に一度、今年で6回目となる書作展を、岩本武士さん(号・竹田)が開いた。参観者と会話の生まれる作品展として、漢字、調和体、かな、書画作品を中心に約40点を展示している。岩本さん

2013.8.20-25

は、日々メモ帳と鉛筆を持ち歩き、様々なことばや詩を書きとめていくそう。今回は、その中から震災の人々を励ます内容を選び、全体のテーマとしている。作品は端正な古典臨書から人生訓、軽妙な「自画像」まで実に多彩だ。とりわけ壁一面を使った一文字創作の連作は圧倒される。「叫」「再」など思いのこもった力強い作品群に加え、両端に「あ」「ん」、中央に「ゼロ」を配置する構成の妙が光る。作家が「書道の演出」を意識したと語るように、展示の構成や作品解説が隅々まで行き届いたものとなっている。(H・M/M・S)

第38回城心会書展

熊本県立美術館分館

2013.7.30-8.4



書家の江口幹城さん(八代市)が主宰する社中展である。約50人が「郷土の漢詩に親しむ」をテーマにして漢字の行草書、隷書や調和体等約100点を展示していた。江口会長の力強い力作の漢字に、永田恵清さん、田上恵彩さん、鶴田柴江さん、富山麗舟さんの行草書の大作が印象に残った。特別展示の手島右卿、上田桑鳩、村上三島、栗原蘆水、古谷蒼韻の書は、用筆がたしか味のある線質は、今でも感銘を新たにしている。岩本さん

Visitor's letter

来館者のみなさんからのメッセージ
アンケートに寄せられた感想(抜粋)を紹介します

「魔法の美術館」展
・娘、孫たち10人でできましたが、1歳8か月の孫から幼稚園児、学童、大人まで全員大満足でした。(熊本市・女性70代)
・魔法みたいで、自分で体験したりして楽しかったです。(熊本県・10代女性)

「Welcome to the Jungle」展
・映像作品が多く、いつも以上にじっくりと回ることができた気がします。東南アジアの国々が抱えている政治だつたりを思い起こさせる作品が多く、いつもとは違った雰囲気でした。(熊本県・20代・女性)
・東南アジアの美術に興味があったので、いろんな国の作品が観れて良かったです。(熊本市・30代・女性)

「鉄魂ブギ」展
・大変芸術的で素晴らしい作品を見せていただきました。あんなにも廃材?が活用できるとは思いませんでした!(熊本市・60代・男性)

編集後記

「Welcome to the Jungle 熱々! 東南アジアの現代美術」展、展示をしてみてもしみじみと感じたのですが、作家たちがそれぞれの作品に使用している素材、それは普段わたしたちの身近にあるものなのですが、とても多様で豊かな表情が与えられています。「芭蕉の娘」には中華料理でおなじみのレンゲ(スプーン)が使用されていたり、「寂かな部屋」では、木炭を塗り重ねた紙が何枚も重ねられ、微妙な濃淡と繊細な立体感が出現しています。ぜひ会場でじっくり見て、アジア固有の愛らしさや繊細な美の世界を発見してみてください。

編集長 富澤治子

CAMKも10月12日で11周年を迎えました。個人的ですが私の周りも10月生まれの人が多く、私自身もそうです。ですので、10月はお祭りモードが絶えません。誕生日は、最近嬉しいうより身近な人たちに感謝の気持ちが湧いてきます。CAMKの開館記念日でも同じで、イベントや展覧会に足を運んでくださる方や、協力してくださる方々にとても感謝の気持ちでいっぱいになりました。12年目のCAMKもどうぞよろしくお願ひ申し上げます!

担当 濱川倫子

「執筆者覧」* 原稿の文末にイニシャル表記
兼城昌山(書道家)(S・K)

蔵座江美(熊本市現代美術館主任学芸員)(E・Z)
富澤治子(熊本市現代美術館主任学芸員)(H・T)
坂本顕子(熊本市現代美術館主任学芸員)(A・S)
芦田彩葵(熊本市現代美術館主任学芸員)(A・A)
佐々木玄太郎(熊本市現代美術館学芸員)(G・S)
濱川倫子(熊本市現代美術館学芸員アシスタント)(N・H)
丸吉ゆかり(熊本市現代美術館学芸員アシスタント)(Y・M)
平原奈津美(熊本市現代美術館学芸員アシスタント)(N・H)
大田黒翔代(熊本市現代美術館学芸員アシスタント)(K・O)

ART KISS LETTER アートキッスレター

vol.64 秋号(2013年11月) 【無料】

発行人: 桜井武

編集: 富澤治子 濱川倫子

デザイン: 石井克昌(MOTOSHIKI)

印刷: シモダ印刷

発行: 熊本市現代美術館

860・0845

熊本市中央区上通町2-3

電話 096・278・7500

ファックス 096・359・7892

http://www.camk.or.jp/

【次号は新春号(1月発行予定)】

SUITOTTO KUMAMOTO

熊本 の 文化 を 支 える 人 々 を ご 紹 介 し ます。

熊本市現代美術館で毎週月曜日に開催している「月曜ロードショー」では、聴覚障害者の方にも日本映画を楽しんでいただくために、年に3本程度、日本語字幕付きで上映しています。今回は熊本県聴覚障害者情報提供センターで、その字幕制作を手がけておられる字幕制作ボランティア「おむすび」の、開設当初からのメンバーである水民喜代さんに、日本語字幕についてお話をいただきました。

字幕制作ボランティア「おむすび」 水民喜代さん 〈前編〉



熊本県聴覚障害者情報提供センターの水民と申します。

熊本県聴覚障害者情報提供センターは、聴覚障害者のための施設で、字幕・手話がついたビデオやDVDの制作と貸出・コミュニケーション支援・相談などの事業を行っています。

こちらの現代美術館では、月曜ロードショーで年に3本ほど邦画を字幕付きで上映されるということで、平成18年からその字幕制作の依頼を受けています。これは画面の外に字幕を出します。後で実際に観ていただくとかわりますが、映画の中に字幕を作るのではなくて、画面の外に字幕を投影する形になります。いろんな字幕の形式があるのですが、私が日頃やっている業務は、映像の中に字幕を入れて編集するということをやっています。主に今やっているのは、放送前に字幕をつけて編集してテープに書き出すという仕事です。熊本の広報番組の「くまモン調査隊」などをやっています。

聴覚障害の内容についてはいろいろ難しいことがありますが、今日は字幕についての話です。

情報が入らないという部分を補うために字幕をつけています。生活全体の情報からするとほんの一部ですが、先ほどおっしゃったように映画に字幕がつく、そうすると映画の中の会話がわかる。会話がわかると映画が楽しめるというだけではありません。生まれつき難聴の方だったりすると、普段まわりで話されていることがわからないでいます。それがホームドラマに字幕がついていると、お父さんと娘はこういった会話をしているんだ、とか、また自分に対しての会話だけでなく、家族同士の会話が字幕になることで見えてくる。

それから、主人公以外が話している場面もあります。お父さん、お母さんが主人公の兄弟のことを話したり、妹を心配していたりするドラマがあったとしたら、「そうか、自分のいないところでも家族が話しているんだ。会話していろいろ考えているんだということが、映像と字幕が一緒になって初めてわかった。」という感想を話された人もいらっしゃいます。

また、昔は日本映画に字幕がつくことはまったくなかったのですが、いつも洋画を観られていたそうです。洋画には字幕がついているので、洋画好きなら洋画の方はたくさんいらっしゃいます。ずっと洋画を観られていたある方の方が、あるとき字幕付きの日本のドラマを観られて、「あ、そうか」と思われたことがあったんだそうです。その方は若いときにたくさん洋画を観られていたので、物事の対処のしかたが外国人ばかりだったんだそうです。「あなたはアメリカ人みたいだね」とよく言われていたそうなんです。それがどうしてなのかよくわからなかった。

でも日本のドラマを観たら、日本人の物の言い方が文字になって出てくるので、ストーリーじゃなくて曖昧に言ったりとか語尾を濁したりとか、そういった日本人らしさというものがそのドラマの中にある。それで、「あーやっぱり洋画とは違うな」と思われたんだそうです。

字幕をつけることで日本の文化も情報として入ってくる。だから以前字幕がなかった頃と比べると今はだいぶ違うと思います。

最初は字幕が手書きだったんです。多分昭和58年くらいは機械で入れるようなものではなくて、書いていたと思うんですが、そのちよつと前までは手書きでした。テレビでも手書きのテロップだったそうです。その方法をどこかで習得してきたんだと思います。この黒い紙に白い文字が書いてあるものをカメラで撮って、そうすると黒い部分が抜けて、合成すると文字だけが写ります。次はこれが写植と言いますが、印刷会社に作ってもらっていたそうです。原稿を書いて印刷してもらってそれを切り抜いて貼っていたそうです。こういうのを重ねて、1台のカメラだと字幕を変えていくことができないので、2台で切り替えながらやっていたそうです。

私はこのやり方は写真でしか見たことがないです。機械自体は、ボランティアで行き始めたころに見たことがあります。私は字幕をパソコンで作るようになった頃に使い方を習って、ボランティアを始めました。最初の頃は漠然としたボランティアの集まりだったので、平成元年に「字幕サークルおむすび」を設立しました。

今は字幕の話だけしていますが、聴覚障害者に一番わかりやすい映像の制作というのがあります。手話を入れたり、語り手自身が聞こえない方で手話で話したり、そういった番組の制作をやっています。

一方で、放送では1980年に字幕放送が始まりました。NHKが先なんです。そのあとに民放でも始まりました。今みなさんは地上デジタル放送を見ていらっしゃると思います。字幕のボタンを押すと字幕が出てきます。見られたことありますか？今は、NHKも民放もゴールデンタイムの7時から10時までの番組にはほとんど字幕が付いています。ニュースにもついています。ところが、キー局、つまり

中央から流れてくる番組だけに字幕がついているんですよ。熊本のローカル番組になると字幕がつかない。ニュースも字幕がなくなりました。そのことで起こってくるのが、地元のことからわからない、という状況です。今でも地元の情報が入りにくい状態です。

映画に関しては、最初に聴覚障害者向け字幕がついたのを私が観たのは「千利休」だったと思います。これは映画会社がつけたのではなくて、日本映画に字幕をつけていこうというような会が東京にあつてボランティアでお金を集めて回つて、1本映画会社にフィルムを作ってもらったんだそうです。

当時、字幕付きのフィルムを1本作るのに100万か200万ほどかかるって聞きました。この会でお金を集めて作って、全国各地で上映されましたので、熊本で上映されたときに観に行きました。このときはボランティアによる活動だったんですけど、字幕付き映画が少しずつ増えていきました。最初に松竹が字幕をつけるようになったと思ったら、東宝とか東映も始まりました。それからジブリは必ず字幕をつけて出されています。ただ、上映日が1〜2日間と短いです。聞こえない人はその日程の情報を探さないとキャッチできない。自分でその情報を探さないといけない。

また字幕つき上映が福岡止まりということがよくあります。それで、福岡まで観に行く人もいました。私たちが劇場映画の字幕を作ったことはないですが、熊本の映画がDVDになるときに字幕を作ったことはありましたね。実際に、今字幕サークルで何に字幕を付けているかというと、多くは放送後の映像に字幕をつけています。

(後編に続く)

平成25年8月19日(月)に学芸員実習生を対象とした講義内容からの抜粋。(編集: E-C)